

市民による近代建築保存運動の記録

—熊本市役所花畑町別館（旧熊本貯金支局）の例—

大宮司 勝弘

従来の近代建築研究では建築物の作品性や歴史的な位置づけが評価の対象とされてきたが、その建築物が立地する地域において、その建築物を使用してきた人々や、景観として受け入れてきた人々による評価の視点が少なかったように思われる。ところで、現在解体が取り沙汰されている築81年の熊本市役所花畑町別館（旧熊本貯金支局）において、市民レベルでの保存運動が複数起こされている。そこで本稿では、新たな近代建築評価軸の模索として、「市民から親しまれた近代建築」といった事象を見つめ、それを取り巻く市民活動の動機や経緯を取材し記録する。

キーワード：熊本市 近代建築 国際様式 市民運動 保存活動

1. 建物について

熊本市役所花畑町別館は旧熊本貯金支局の建物（写真1）で、二二六事件のあった1936（昭和11）年2月26日に完成した。ファサードに大開口が規則的に並んだ焦茶色の建物は、市内中心部の熊本城の足下、電車通り沿いにあり、街並みの一部を構成し長年市民に親しまれてきた。貯金局の設置については熊本市が福岡市との誘致合戦の後、市が建設し、国に貸すことで誘致に成功している¹⁾。1936（昭和11）年3月28日に落成式が行われたが地元新聞は1面を使って報じている（記事1）。

その後、戦時下の熊本大空襲（1945）、戦後の白川大水害（1958）を耐え、戦後の街の発展を眺めてきた、都市の歴史を語るうえで欠かせない重要建築である。

本建物の学術上の評価については先行研究^{2)・3)}に詳しいが、まずその要点をまとめる。

設計は通信省営繕課であり、山田守が担当した。多くが曲線を駆使した設計で知られるが、この建物においては1929（昭和4）年の渡欧における国



写真1 竣工時の熊本貯金支局

際様式（インターナショナルスタイル）の影響を強く感じさせ、無用な装飾を排し、開口部分割のプロポーションだけでファサードデザインの勝負をしたような幾何学的でストイックな表情が印象的（写真2～4）である。これは同時代の通信建築に多く使われた手法でもあった。内部も逆梁の採用により可能になった天井近くまでの窓や、換気縦ダクトを内蔵した柱（写真5）など、当時の先駆的な技術の痕跡を確認することができる。



記事 1 九州新聞「熊本貯金支局の新築成る」



写真 5 ダクト内蔵柱列



写真 6 ドライエリアに残るタイル



写真 7 追加配管



写真 8 玄関受付



写真 9 階段



写真 10 雁行窓



写真 2 現在の熊本市役所花畑町別館 (東側)



写真 3 南西側



写真 4 北東側

竣工時は鉄筋コンクリート造3階建てだったが、1950（昭和25）年に屋上部分に4階が鉄骨造で増築され、その後裏側の空地部分に鉄骨造の議会棟が増築されている。また建物外装は馬目地に貼られたチョコレート色のタイルで覆われていたが（写真6）、現在はタイルの剥離防止を目的としたと考えられる焦げ茶色のモルタルでコーティングされ、質感が異なっている。さらにファサード面を這う配管類が追加され、垂直に下されていた雨樋はエルボ（屈曲部）を持つものに交換されているなど、建物の美しい表情を危うくする改造も施されている（写真7）。

内部空間は機能主義ながら曲面を入れるなど工夫されている（写真8～10）

1975（昭和50）年、貯金局が移転の後は熊本市役所により別館として使用され、2016（平成28）年3月末をもって機能を停止した。

2. 解体計画の公表と保存を求める声

2-1 本建物建替構想と耐震診断

建築史上も熊本の都市史にも貴重な建物だが、1993（平成5）年3月20日の地元有力紙「熊本日日新聞」（以降「熊日」）朝刊に、「本建物を建て替えれば最大9階建てが可能となる」旨の市議会総務委員会での質疑が報道された。また、耐震強度上の問題が取り沙汰され、2002（平成14）年3月1日に「耐震診断報告書」がまとめられている。当時は建設時の構造設計図面の存在が知られて無く、前提条件を仮定しながらのものとなったが、最終評価は「耐震性能が不足するが、耐震補強が可能である」とされている。現行の耐震基準である1981（昭和56）年以前の建築物における、建設時の図面も参照していない比較的不利な判定であるが、「耐震補強が困難」とはされていない。なお本建物建設時の構造設計図面の存在は拙著論文で2005（平成17）年に公表している⁴⁾。

2-2 本建物解体が具体化

2007（平成19）年8月13日、「熊日」に本建物の建て替えが検討されていることが報道された。熊本市の主張としては本建物の古さや耐震性能が問題とされ、市役所周辺の民間ビルに入居している市の部門を1か所に統合することを目的としている。またPFI（民間資金を使った公共事業方式）採用の検討にも言及している（記事2）。

この検討に最初に異議を唱えたのは熊本まちなみトラスト会長の西嶋公一氏である。それは「熊日」2007（平成19）年12月3日の紙面に掲載された。熊本市内に残る貴重な建築群と本建物の紹介がなされ、熊本城下の地域での重要な位置にあることからその遺産の積極的な活用を提案している。ポスト築城400年の風格ある都市づくりのなかで近代の遺産を活かすよう主張している（記事3）。

2-3 本建物閉鎖

その後、本建物に対する市の方針は先送りが続いたが、2015（平成27）年2月12日に「熊日」にて翌年3月末で閉鎖することが報道された（記事4）。呼応して、5月13日の「熊日」にて田中智之熊本大学大学院准教授による「『熊本市役所



記事 2

記事 4



記事 3 「昭和の名建築旧熊本貯金局」



記事 5 「熊本市役所花畑町別館を考える」

『花畑町別館』を考へる」とした論考が発表された。解体でも凍結保存でもない、「動的」活用で魅力再生を訴えている（記事5）。

3. 保存に関わる人々の動き

3-1 学生らによる企画

2007（平成19）年11月、大谷一翔氏を代表として、熊本県内の建築学科及びその関連学科のある、崇城大学、熊本大学、熊本県立大学、九州東海大学の4大学の学部生と大学院生、またその卒業生らは「Archestra - 建築創造企画委員会 -」という団体を立ち上げた。設立趣意には、新しい建築、古い建築、これから建つ建築、もうなくなった建築、これら全てを対象とし、これらを個として扱うのではなく、周辺的环境や熊本県の都市全体として、更には、熊本県の過去の歴史や現状、今後の展望なども含め、あらゆる方面から着目、これら全てを踏まえた上で、社会や都市に対して有効に働きかけるための仕組みや方法を建築的に考察し、後世に伝え、熊本県の活性化に役立てるとある。

3-1-1 シンポジウム

彼ら最初のプロジェクトとして本建物と敷地が扱われることになる。最初に「花畑別館の秘密 - 討論会から探る旧熊本貯金支局 -」と称し、見学会が2008（平成20）年5月9日、シンポジウムが翌5月10日に熊本市現代美術館ホームギャラリーにて開催された（図1）。シンポジウムではまず「過去から観る熊本の展望」と題して講演が行われ、次に本建物の紹介と熊本市内の改修事例として「PS オランジュリ（旧熊本第一銀行）」（1919）と「上熊本駅前電停（旧 JR 上熊本駅舎）」（1913）が報告された。他にも各地の近代建築改修保存事例が紹介されている。討論会では建築関係者、学生、本建物の使用者、観光関係など様々な年齢及び属性の参加者らから意見を募ったが、本建物の活用として歴史を紹介するギャラリー、熊本城域との連携観光施設、市民が気軽に訪れることができるレストランやカフェスペース、都心居住の場、等の活用意見が出された。必ずしも本建物の完全保存ではなく、オリジナルのデザイン



図1 花畑別館の秘密 討論会ポスター



図2 MAMORU × マモル展ポスター

を維持しながら活用を求めた意見が多かったようである（写真11）。

3-1-2 検討結果の展示会

次に「MAMORU × マモル展」と題した展示会が2008年11月24日から12月8日までギャラリー創泉で開催された。オープニングシンポジウムは「Re:Start—再出発の始まり—」と称して11月24日に熊本県民交流会館パレオ10階和室にて行われ、ゲストの岩岡竜夫東海大学（当時）教授による山田守の解説を行っている（図2）。

展示物は、旧熊本貯金支局の復元模型（縮尺50分の1・写真12,13）、設計者山田守の作品紹介パネルと映像作品、花畑町別館周辺模型（縮尺200分の1・写真14）とメンバーによる花畑町別館アイデア模型、そして熊本大学建築学科での授業における学生のプレゼンテーションボードであった。

メンバーによる花畑町別館アイデア模型では11案が提出され、本建物をそのまま残し、利用するもの、大きく改造するもの、立面の印象を残し新築するもの、市の構想を検討したもの、初回のシンポジウムの意見を集約し設計されたもの、すべて解体し公園にするものなど、様々な提案、検討がなされている。



写真11



写真14



写真12



写真13

3-2 個人による活動

ひとりで活動されている方がいる。市内在住のN氏は「熊本ビル部」と称し、熊本県内の建物を対象としてA3判両面カラー刷りのリトルプレスシリーズを自費出版して書店や映画館のフリーペーパーのコーナー等で無料配布しており、国立国会図書館へも収められている。現在まで5件が紹介され、本建築についても紹介をしている。

最初の発行は2014（平成26）年10月であり、「JR三角線網田駅本屋」（1899・登録有形文化財）を扱っている。これは文化財登録推進活動にN氏が関わったのがきっかけだった。300部が発行された。

次が本建物のもので2015（平成27）年9月に1000部が発行された（図3、4）。またこれについては保存活動の盛り上がりを受け、A4判の続編が2017（平成29）年2月に制作され、400部を発行している。

他は2016（平成28）年3月に「熊本県医師会館」（坂倉準三設計・1968・現存しない）300部、7月に「熊本県立美術館」（前川國男設計・1976）500部、11月に「熊本県立劇場」（前川國男設計・1982）500部が発行された（発行部数は2017年3月現在）。

いずれも非常に人気があり、配布場所では1日に100部がなくなるケースもある。

企画されているN氏は建築に関わらない一般の方だが、建物について深く研究されている。一般市民個人による建築保存、プロパガンダの試みとして注目される。



図3 リトルプレス：表面（A3サイズを縮小）



図4 リトルプレス：裏面（A3サイズを縮小）

3-3 保存を訴えない新しい概念による活動

「けんちく寿プロジェクト」は2010（平成22）年に前述の西嶋公一氏が県内の建築専門家に呼びかけて始まったプロジェクトで、従来の所有者との間に敵対関係を作りやすい建築保存運動から脱却し、普段から所有者と共に建物の節目を祝うというユニークな試みである。人の節目になぞらえ、建物の成人、還暦、卒寿などを見学会などイベントで盛り上げている（図5）。

第1回は2010年12月4日、「熊本北警察署」（篠原一男設計・1990）の「二十歳のお祝い」が行われ、見学会と関係者や周辺住民からのメッセージの披露と贈呈、設計及び施工に関係した方々による座談会などが行われた。

第2回は2011（平成23）年11月12日、「二つの医師会館建築を寿ぐ」と題して「熊本市医師会館・看護専門学校」（古谷誠章＋NASCA・中川建築設計共同企業体設計・2011）の「誕生」と「熊本県医師会館」（前述）の「厄晴れ」を祝った。建築見学会や設計者・ゲストによる座談会等を開催

した。

第3回は2012（平成24）年12月1日に「熊本通信病院（現くまもと森都総合病院）」（山田守設計・DOCOMOMO選・1958）の「還暦」を祝い、見学会と関係者によるテーマトークが行われた。また、熊本大学田中研究室の学生有志で結成された「ことぶかせたい」がDOCOMOMO選の理由について検証を行った。

その他、第4回は2013（平成25）年12月7日に「九州学院高等学校講堂兼礼拝堂」（ヴォーリズ設計・登録有形文化財・1924）の「卒寿」、第5回は2015（平成27）年1月10日に「熊本県伝統工芸館」（菊竹清訓設計・1982）の「厄晴れ」、第6回は2016（平成28）年1月9日に「八代市立博物館 未来の森ミュージアム」（伊東豊雄設計・1991）の「小厄」を祝うイベントを開催している。

第7回は2017（平成29）年3月5日に「孤風院（旧熊本高等学校講堂）」（太田次郎吉・1908、1975年に木島安史により移築保存）の清掃、修繕を行った。いずれも熊本在住の学生達が企画運営に携わっている。「保存ありき」の活動は避け、所有者との信頼関係を築きながら、熊本の建築文化醸成に役立つものとなっている。所有者がイベントを通して、その建物の価値に気が付く場面もあるようだ⁵⁾。

本建物については後述するシンポジウムでの協力を行っている。

けんちく寿プロジェクト



図5 けんちく寿プロジェクト リーフレット

4. 本建物の保存を目的にした活動

4-1 「熊本市役所花畑町別館を活かす会」設立

2015（平成27）年8月、本建築を熊本の財産として残すよう要望する為に、市内の一般主婦、江藤圭子氏、福田扶美子氏、他1名の3人により「熊本市役所花畑町別館を活かす会」（以降「活かす会」）が立ち上げられ、市長や市議会への陳情活動の他、見学会やシンポジウム、署名活動、街頭演説などを行っている。

なお、「活かす会」の設立は「熊日」で報道（記事6）されており、見学会、シンポジウムなども追って報道されている。地元の関心の高さが伺える。



記事7 第1回見学会記事



記事6 「活かす会」発足

4-2 見学会

第1回目は2015（平成27）年8月31日に田中智之熊本大学大学院准教授の案内で開催された（記事7）。

第2回目は同年10月16日に磯田桂史熊本大学五高記念館客員教授の案内で開催された（記事8）。

第3回目は2016（平成28）年2月21日に磯田節子熊本高等専門学校特命客員教授の案内で開催された。それぞれ30名程度の参加者があった。



記事8 第2回見学会記事

4-3 シンポジウム

「活かす会」は前述の西嶋氏をコーディネーターに迎え、2回のシンポジウムを開催した。

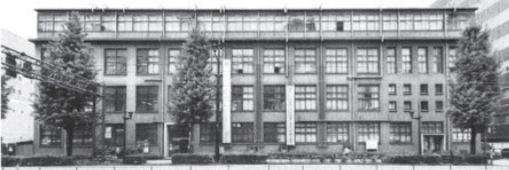
4-3-1 第1回シンポジウム

「熊本市役所花畑町別館を残して まちと共に生きる建築に vol.1」（図6）

2015（平成27）年12月20日に熊本学園大学にて開催された。まず、本建物の設計者である山田守を知るために、研究者である著者による解説を行った。また、鯉坂徹鹿兒島大学教授からはリビングヘリテージについて事例の解説、大谷一翔

市民シンポジウム
熊本市役所花畑町別館を残して
まちと共に生きる建築に vol.1

2015.12/20(日) 13:30 (開場 13:00) ~ 16:30
熊本学園大学 14号館 1421教室 (後の壁面の建物)
※入場無料 ※ご来場には公共交通機関をご利用下さい



全体司会 福田 扶美子 熊本市役所花畑町別館を活かす会 共同代表

**第1部「近代建築史のなかの山田 守と
熊本市役所花畑別館 (旧熊本貯金支局)」** (13:30~15:00)
大宮司 勝弘 東京家政学院大学 助教、DOCOMOMO JAPAN 幹事

第2部「まちと共に生きる建築とは」 (15:10~16:30)
山田守研究の第一人者 大宮司 勝弘 同上
近代建築の再生・設計に数々の業績 鯉坂 徹 鹿児島大学大学院 教授、DOCOMOMO JAPAN 幹事
7年前に活用案を学生提案 大谷 一輝 建築空間デザイン archestra 共同代表
貯金局時代に勤務経験 江藤 圭子 熊本市役所花畑町別館を活かす会 共同代表
コーディネーター 西嶋 公一 熊本まちなみトラスト会長、けんちく寿プロジェクト実行委員

主催：熊本市役所花畑町別館を活かす会 共催：(一社)日本建築学会九州支部 熊本支所
協力：熊本産業遺産研究会、熊本まちなみトラスト、けんちく寿プロジェクト
お問合せ：熊本市役所花畑町別館を活かす会
江藤 圭子 福田 扶美子



図6 第1回シンポジウムリーフレット

市民シンポジウム 熊本市役所花畑町別館を残してまちと共に生きる建築に vol.2

熊本地震を乗り越えた
花畑町別館の再生

2016.10/23(日) 13:30 (開場 13:00) ~ 16:30
熊本大学 工学部 百周年記念館
※入場無料 ※ご来場には公共交通機関をご利用下さい

全体司会 福田 扶美子 熊本市役所花畑町別館を活かす会 共同代表

第1部「熊本大空襲、白川水害、熊本地震を生きた近代建築」
活動報告 江藤 圭子 熊本市役所花畑町別館を活かす会 共同代表
DOCOMOMOの活動と選定の意義 松隈 洋 DOCOMOMO Japan 代表、京都工芸繊維大学 教授
選定経緯(映像・配布資料による) 大宮司 勝弘 DOCOMOMO Japan 幹事、東京家政学院大学 助教
学会発表報告 伊藤 重剛 日本建築学会 熊本支所長、熊本大学 教授

第2部「まちと共に生きるリビング・ヘリテージとは」
再生事例と再生案の考えかた 鯉坂 徹 DOCOMOMO Japan 幹事、鹿児島大学大学院 教授
花畑町別館の再生案の提案 鹿児島大学 鯉坂研究室
熊本大学 田中智之研究室
佐賀大学 平瀬研究室
意見交換進行 西嶋 公一 熊本まちなみトラスト会長、けんちく寿プロジェクト実行委員

主催：熊本市役所花畑町別館を活かす会
共催：DOCOMOMO Japan、日本建築学会九州支部 熊本支所、熊本まちなみトラスト、Archestra-建築創造企画委員会
協力：熊本産業遺産研究会、けんちく寿プロジェクト
お問合せ：熊本市役所花畑町別館を活かす会
江藤 圭子 福田 扶美子



●10/24(月)に DOCOMOMO Japan による熊本市への選定プレート贈呈が予定されています。

図7 第2回シンポジウムリーフレット

氏より前述の「Archestra - 建築創造企画委員会 -」についての報告があった。なお、開催団体は以下の通り。

主催：熊本市役所花畑町別館を活かす会

共催：(一社)日本建築学会九州支部 熊本支所

協力：熊本産業遺産研究会、熊本まちなみトラスト、けんちく寿プロジェクト

後援：DOCOMOMO Japan

なお、「熊日」では12月10日に予告記事(記事9)、21日に報告記事(記事10)を掲載している。

4-3-2 第2回シンポジウム「熊本市役所花畑町別館を残してまちと共に生きる建築に vol.2『熊本地震を乗り越えた花畑町別館の再生』」(図7)

2016(平成28)年10月23日にはDOCOMOMO選定を受け(後述)、第2回のシンポジウムが熊本大学 工学部 百周年記念館にて開催された。

選定の意義等について松隈 洋 DOCOMOMO Japan 代表(京都工芸繊維大学 教授)から説明がなされ、筆者による経緯の報告、更に本建物の再生について、鹿児島大学 鯉坂徹研究室、熊本大学 田中智之研究室、佐賀大学平瀬有人研究室の3研究室、計5作品の提案をもとに討論が行われた。開催団体は以下の通り。

主催：熊本市役所花畑町別館を活かす会

共催：DOCOMOMO Japan、日本建築学会九州支部 熊本支所、熊本まちなみトラスト、Archestra-建築創造企画委員会

後援：日本イコモス国内委員会

協力：熊本産業遺産研究会、けんちく寿プロジェクト、くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

「熊日」では10月24日に報告記事(記事11)を掲載している。

4-4 署名活動

熊本市内各所の街頭、コンサート会場、組織等で本建物の保存を求めるチラシ(図8)約800枚を市民へ配布するとともに署名活動を行った。最終的に3,170筆⁶⁾の署名が集まっている。

市民グループシンポ 20日・熊本学園大



保存活用考える
熊本市役所花畑別館
熊本市役所花畑別館は、昭和30年代に建設された、戦後復興の象徴的な建物である。この建物の保存と活用について、市民グループがシンポジウムを開催し、意見を述べた。

市役所花畑別館

保存活用考える

市民グループは、この建物の歴史的価値を高く評価し、解体を望まないという意見が多数を占めた。また、この建物を活用するための具体的な提案もいくつか出された。

記事9 第1回シンポジウムを予告する記事

花畑町別館 価値訴え

中央区 保存活用求めるシンポ

熊本市役所花畑別館は、昭和30年代に建設された、戦後復興の象徴的な建物である。この建物の保存と活用について、市民グループがシンポジウムを開催し、意見を述べた。



記事10 第1回シンポジウムを伝える記事

熊本市 熊本市役所花畑別館
熊本市役所花畑別館は、昭和30年代に建設された、戦後復興の象徴的な建物である。この建物の保存と活用について、市民グループがシンポジウムを開催し、意見を述べた。

記事11 第2回シンポジウムを伝える記事

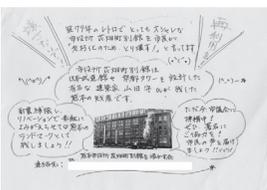


図8 チラシ1(A5サイズ) 図9 チラシ2(A4サイズ)

花畑別館保存を
3075人の署名提出
熊本市役所花畑別館(中央区)は、1986年建設された。この建物の保存と活用について、市民グループが署名を提出し、解体を望まないという意見を述べた。



熊本市の熊本秋生館課課長(左)に、3075人の署名を手に渡す。熊本市役所花畑町別館を活かす会。のメンバー。熊本市中央区

「活かす会」は、この建物の保存と活用を目的として設立された。この会のメンバーは、現在9人で活動している。この会の活動は、市民グループの活動と連携して行われている。

記事12 市への署名提出

署名は市に提出されたがその様子は12月22日の「熊日」で報道された(記事12)。

4-5 街頭演説

2017(平成29)年2月から3月には計7回、本建物の重要性を説く街頭演説が行われ、チラシ(図9)約1200枚が配布された。署名活動や街頭演説により共感した市民も活動に加わり、「活かす会」のメンバーは現在9人で活動している。

4-6 活動の動機

「活かす会」設立の動機について江藤圭子氏と福田扶美子氏にインタビューを行った。

メンバーは建築については素人だったが「熊本市産業文化会館」解体時に鯉坂徹鹿児島大学教授の話を聞いて、近代建築の重要性に気付かされたそうである。そして前述(2-3)の田中智之准教授の論考で本建物の重要性に気が付かれ、活動を開始した。

また、建物の重要性と同時に震災復興の途上における余計な解体工事を行うことによる、税金の無駄遣いも問題視している。本建物においては特に戦災、水害、そして熊本地震にも耐えたことから復興のシンボルにも成り得るとも主張している。

5. 学術団体の対応

5-1 日本建築学会九州支部

2016（平成28）年2月8日付で日本建築学会九州支部より本建物に対する保存要望書が市長宛に提出されている（記事13）。



記事13 日本建築学会から保存要望書提出

5-2 DOCOMOMO Japan

DOCOMOMO Japan⁷⁾ は1999年から2014年度までに184件の国内建築物の選定を行った。

選定に必要なフィッシュ（調査報告書）作成のため筆者により本建物の調査を行ったが、その様子は「熊日」に取り上げられている（記事14）。

その結果、2015年度は13件が新たに追加されたが、本建物も加わることになった。これには危機遺産としての認識が含まれている（記事15）。

その後、2016（平成28）年10月24日付で「熊本市役所花畑町別館の解体工事着手中止および庁舎保存に関する要望書」が熊本市長宛に提出された。要点は以下の4点になる。

1. 日本の近代化に大きな功績を果たしてきた郵政事業を代表する遺産。
2. 熊本市街を構成する都市建築の規範として設計されたもので、熊本城下の景観を維持する建物として貴重な存在。

3. 熊本大空襲、白川大水害を耐え、その都度復興してきた熊本の都市史を語るうえでも貴重な存在。
4. 原構造設計図面を参照したうえでコスト等を含めた合理的な保存改修計画の立案をすべき。

なお、同時に熊本市役所内で選定記念プレートの贈呈式と記者会見が行われている。



記事14 DOCOMOMO Japanによる調査



記事15 DOCOMOMO Japan 選定を伝える記事

5-3 日本イコモス国内委員会

世界遺産の諮問機関である日本イコモス国内委員会は2016（平成28）年10月3日に市長宛に「熊本市役所花畑町別館の活用に関する要望書」を提出した（記事16）。



記事 16 日本イコモスから保存要望書提出

6. 熊本地震の影響と熊本市の対応

6-1 熊本地震発生

保存活動途上の2016(平成28)年4月14日夜、熊本市で震度6弱の前震、16日未明には熊本市で震度6強の本震を記録した「平成28年熊本地震」が発生した。著者は5月11日に外観調査をしたが、4階増築部分にサッシの脱落や外壁の剥離、同敷地内の鉄骨造旧議会棟に外壁の脱落があったが、竣工時の部分においては全く無傷であった。市内の新築建物にも被害があった中で、築80年の本建物が無傷だったことは評価に値するだろう。

ただし4月26日に行われた応急危険度判定では、増築部分の損傷が影響し「危険」の判定になっている(写真15)。なお、応急危険度判定は、行政が民間判定士のボランティアによる協力のもとに、地震により被災した建築物による二次的災害を防止する目的で実施されるもので、被災建築物の恒久的使用の可否を判定するなどの目的で行うものではない。

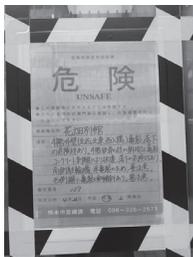


写真 15 応急危険度判定張り紙(2017年3月26日時点も掲示のままだった)

6-2 学術団体に対する市長の回答

前述のDOCOMOMO Japanの要望書に対して、2016(平成28)年12月5日付で大西熊本市長より回答があった。要点は以下の4点になる。

1. 耐震性が劣っている。
2. 分散して非効率になっている本庁機能の集約を図りたい。
3. 熊本地震により被災しているため、沿道の安全確保を早期に図りたい。
4. 歴史的文化的重要性は認識しており、報告書をまとめると共に、部材の一部を保存したい。

以上の回答は建築学会九州支部、日本イコモスへの回答とほぼ同じで、内容に疑問が多く、3会合同で解体中止を求めた緊急保存要望書を2017年1月23日に再度提出している(記事17)。

今後も本建物は事務スペースとして利用したうえで、要望は以下の3点になる。

1. 文化財的価値を市幹部に説明する機会。
2. 専門家による解体前の学術的調査
3. 竣工時図面を使用した耐震診断の再度実施



記事 17 3会合同による解体中止緊急要望

この再要望に対し、大西市長の回答が2月23日にあった。前回の回答とほぼ変わらないが、以下の追加があった。

5. 花畑町別館の跡地利用に関しては財政状況を考慮しながら検討していくことになっており、現在の建物の意匠等について継承で

きないか検討する。

要望に対しての明確な回答は無いものとなっている。検討する余地が全くないとも取れる内容である。跡地に対してもすぐ新築が行われるわけでは無い事が判った。

なお、残す部材については今のところ不明で、調査報告は伊藤重剛熊本大学大学院教授によりまとめられる。

6-3 本建物体へ

2017（平成 29）年 1 月 25 日、大西市長は本建物の解体方針を変えず、来月に解体する旨、発表した（記事 18）。

同年 2 月、本建物の解体工事について入札が行われ、22 日に開札、業者が決定した。解体にかかる費用は 1 億 9229 万 1000 円である。本建物は竣工から 81 年で終焉を迎えることになった（写真 16）。



記事 18 「花畑町別館 来月にも解体」
熊本市長「方針変えない」



写真 16 解体工事告知看板

7. 考察

今回はとても残念な結果となった。行政の業務遂行のプロセスに市民の意見を反映させるのとても困難が伴うことが判る。

無駄な装飾を排し、機能性を重視した国際様式が選択された本建物は、当時としては斬新だったものの、経済合理性に基づく機能主義が一般化した現代においては、その作品性を説明するのは、建築史における予備知識を持たない限り、非常に困難であることを認めざるを得ない。特に本建物はその後の改修で建物外観の美的面を毀損してしまった部分が多い。建築の延命のためにも改修工事は避けられないが、その手法には注意が必要である。

また、中心市街地にあり、現行基準における多くの許容容積を余らせていることもあって、経済面から保存に対する共感を得にくい部分もある。経済的にも説得力のある歴史的建築物の活用手法の確立が必要に感じられる。

そのような不利な状況の中でも、学生や建築業界に無縁な一般の熊本市民が声を上げ、様々な活動でアピールし、建築学術団体まで動かすに至ったことは特筆に値する。また地元有力紙の「熊本日日新聞」は彼らの動きを随時紹介しており、本稿で紹介した以外にも多くの関連記事を掲載し、報道の使命を十分に果たしている。

熊本の街にこだわり、保存運動を行う彼らに、我々研究者が何をサポートできるか、歴史的建築物の重要性や建築文化を広める意味でも、考えていくべきだろう。

ところで、今まで学術的に検討されなかった、81 年間存続した建物がその時間によって獲得した「愛着」というものの積極的評価について必要性を感じたところである。

8. まとめ

以上、市民による本建物の保存運動についてまとめた。近代建築保存には非常に困難な課題が多く、保存は叶わなかったが、市民の熱心な活動を本建物のもう一つの重要な評価として記録した。

2016（平成 28）年には「国立西洋美術館」（ル・コルビュジェ設計）が世界遺産となり、近代建築

にも脚光があたりはじめている。今後も近代建築の理解を進めるために、研究を続けていきたい。

引用文献及び注

- 1) 新熊本市史 別編 第三巻、p103、2003
- 2) 石橋雅子・伊藤重剛：旧熊本貯金支局の建築に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告第54号、pp549-551、2015
- 3) 大宮司勝弘：熊本市役所花畑町別館（旧熊本貯金支局）の現状報告 山田守作品研究：15、日本建築学会学術講演梗概集、F-2、建築歴史・意匠、2016
- 4) 大宮司勝弘：建築家「山田守」の現存する設計図面について、東京家政学院大学紀要 自然科学・工学系 (45)、pp 41-48、2005
- 5) 日経 BP 社：日経アーキテクチャ 2014.02.25
- 6) 内訳：直筆署名 3,075 筆 インターネット署名 75 筆 持ち込み協力 26 筆
- 7) DOCOMOMO Japan；モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織の日本支部、1999 年から 2014 年度までに 184 件の国内建築物の選定を行った。筆者も幹事に名を連ねている。

図版出典

[写真]

- 1：『山田守建築作品集』、東海大学出版会、1967
- 2～10、15、16：筆者撮影
- 11～14：Archestra - 建築創造企画委員会提供

[図]

- 1、2：Archestra - 建築創造企画委員会提供
- 3、4：熊本ビル部提供
- 5：けんちく寿プロジェクト提供
- 6～9：熊本市役所花畑町別館を活かす会提供

[新聞記事]

- 1：九州新聞 1936/3/28

- 2：熊本日日新聞 1993/3/20
- 3：熊本日日新聞 2007/12/2
- 4：熊本日日新聞 2015/2/12
- 5：熊本日日新聞 2015/5/13
- 6：熊本日日新聞 2015/8/28
- 7：熊本日日新聞 2015/9/4
- 8：熊本日日新聞 2015/11/17
- 9：熊本日日新聞 2015/12/10
- 10：熊本日日新聞 2015/12/21
- 11：熊本日日新聞 2016/10/24
- 12：熊本日日新聞 2016/12/22
- 13：熊本日日新聞 2016/2/9
- 14：熊本日日新聞 2016/3/31
- 15：熊本日日新聞 2016/6/18
- 16：熊本日日新聞 2016/10/4
- 17：熊本日日新聞 2017/1/25
- 18：熊本日日新聞 2017/1/26

謝辞

本稿をまとめるにあたり多くの方の御協力を賜った。ここに感謝申し上げたい。また本研究にあたっては本学平成 28 年度若手研究者研究費助成を受けている。

資料提供および取材に応じてくださった方々

(50 音順・役職は 2017 年 3 月現在)

- 磯田桂史氏（熊本大学五高記念館客員教授）
 伊藤重剛氏（熊本大学大学院教授）
 江藤圭子氏（熊本市役所花畑町別館を活かす会共同代表）
 大谷一翔氏（Archestra - 建築創造企画委員会 - ）
 西嶋公一氏（熊本まちなみトラスト会長）
 福田扶美子氏（熊本市役所花畑町別館を活かす会共同代表）
 古田孝氏（ルポライター）
 N 氏（熊本ビル部）
-
- (受付 2017.3.29 受理 2017.6.19)